

二〇一三年度 センター試験 漢文 解説速報

【問題講評】

昨年度が比較的やさしかったので今年は難化が予想されたが、さほど難しくはなく、ほぼ平年並みの難易度といえよう。最大の変化は大問が8問に増え、結果として一問あたりの配点が6点と低くなったことだろう。すでに昨年枝問が増えてその傾向は見えていたが、それがより一層はつきりした。一問間違えると8点、9点吹っ飛ばすという心臓に悪い配点から、受験生にはやさしい細かい配点になったことは歓迎してよい。

設問内容に関しては、それほど大きな変化は見られないが、「傍線部から読み取れる筆者の心情（心境）」を問う問題が三問もあつて、論理ではなく、現代文で言えば小説に当たるアプローチを要求される点がちよつと厄介だったかもしれない。しかし、それも筆者が語る事実関係を正確に押さえることができれば、特に難しくはなかったはずである。

【設問解説】

問1 例によって漢字の意味を問う問題。

(1) 「手」は「てづから」と読んで、「自分の手で」の意。授業でも「手記」をその用例としてあげたので覚えていたことだろう。

(2) 「致」は「招く／送る」の意で、用例として「招致・誘致／送致」をあげて説明したはず。これも、すぐ選べたと思う。

問2 筆者の心情を問う問題だが、まず傍線部の意味をきちんと押さえよう。「沢」に「めぐみ」の意味があるのは「澤恵」と覚えたはずだね。よつて①③⑤に絞る。下を見ると「退屈」や「前途への不安」は文意からしておかしいので①が正解とわかる。

問3 基本句形「不復―」（二度と〜しない）から③と⑤に絞る。「省」は「かえりみる」だから当然③が正解。

問4 仲春（二月）に花が咲きそうだったのに左遷され、黄州に来て「周歳」で手紙が来たと言っているから、当然「翌年の春」が正解。

問5 「欲」は下に動詞を伴って「〜んと欲す」（〜しようとする）というのは何度もやった。ヒントは本文3行目の「常に与に飲む者と：樹間に一酔せんとす」と言っていた部分。よつて「隣里親戚と一飲」とわかり①②に絞る。あとは「樂しむは」と主語にとるか、「欲せば」と条件にとるかを、続く「宜しく」以下の文章から判断して②を選ぶ。

問6 選択肢を見れば「事之不可知」の意味を聞いているとわかるが、「知」が何を指しているかは傍線部からはわからない。手がかりは「如此」。「このようである」が指しているのは、直前の「至るに垂として之を失ふ」（花見酒が実現しそうだったのに突然左遷された）ことであり、一寸先の予測がつかないことを言っているのはあきらかだから④が正解。

問7 文末の「安―乎」だから、もちろん「いづくんぞ〜んや」の反語に決まっているので③と⑤に絞る。⑤は「此」を「ここに」と読んでいっておかしいし、直前の「于不可知」は問6から「予測はつかないのだから」とわかるので、文脈からも③が正解とわかるだろう。

問8 随筆読解のポイントは、「筆者の経験・見聞から導き出される教訓」であった。この文章のキモが最後の文にあることはすぐわかったであろう。「まさか左遷されるとは予想もしていなかったが、世の中何が起るか予測がつかないのである、逆に突然戻れることになることだつてあるかもしれない。それを信じよう」と言っているのだから、正解は⑤であるとわかる。

【書き下し】

始め余丙子へいしの秋を以て、宛丘南門えんきゆうの靈通禪刹りやうとうぜんせきの西堂せいどうに寓居す。是の歳さいの季冬きとう、手てつから両海棠りやうかいとうを堂下どうかに植うう。丁丑ていしちゆうの春はるに至り、時じ沢たく屢ら々ば至り、棠もえつ茂も悦えつするなり。仲春ちゆうしゅん、且またに華はなさかんとす。余常よに与ともに飲のむ所の者ものと約やくし、且またつ美酒めいしゆを致いたし、将まさに樹間じゆかんに一醉いちさいせんとす。是の月つきの六日むつき、予た謫たく書しょを被ひり、治行ちぎやうして黄州わうしゆうに之これく。俗事ふくせん紛然ふんぜんとし、余も亦またた居ゐを遷うつし、因よりて復またた花はなを省しやうみず。黄わうに到いたりて且またに周歲しゆうさいならんとす。寺僧しじゆうの書来しよらいたりて、花はなの自如じじよたるを言いふ。余因よりて思おもふに、茲こゝの棠もえつの植うゑし所ところは、余の寝ねを去さること十步じふほと無く、隣里親戚りんりしんせきと一飲いちんして之これを樂たのしまんと欲ほせば、宜よろしく必ず難かたきこと無なきを得えべきなり。然しかれども至いたるに垂なんとして之これを失なふ。事ことの知しるべからざること此こゝのごとし。今棠もえつを去さること且またに千里せんりならんとし、又またた身みは罪籍ざいせきに在ありて、其そのの行止ぎやうしは未なだ自みづから期きすること能あたはざれば、其そのの棠もえつに于おいては未なだ遽にわかには見みるを得えざるなり。然しかれども均ひとしく知るべからざるに于おいては、則すなはち亦またた安いづくんぞ此こゝの花はなの忽こつぜん然ぜんとして吾われが目前もくぜんに在あらざるを知らんや。

【現代語訳】

始め私は紹聖三年（丙子）の秋、宛丘の町の南門外にある靈通寺の西堂に寓居した。この歳の十二月に、自分の手で二本の海棠の木を堂の近くに植えた。翌四年（丁丑）の春になって、時宜を得た雨がしばしば降り、海棠は盛んに茂って成長した。一月、今にも花が咲きそうになった。私はいつも一緒に飲んでいる仲間と約束をして、うまい酒を取り寄せ、海棠の木の間に花を肴に飲むつもりだった。ところがこの月の六日、私は左遷を命じる文書を受け取り、旅支度をして黄州に赴くことになった。世間が騒然とするなか、私も引越しをすることになって、結局二度とその花を見ることはなかった。黄州にやってきましたもうすぐ一年になるうとして。靈通寺の僧から手紙が来て、海棠の花が去年と同じく花を咲かせたと知らせてきた。それで私がつらつら思うのには、あの海棠の木を植えたのは、私の寝所から十歩も離れてないところで、近隣の友人や親戚と酒を飲んでその花を樂しもうとすれば、きっと難なくできるはずなのであった。けれどもまさにそうなるうとした矢先に、その機を失ったのだ。物事は前もって知ることができないことは、まさにこのとおりである。今海棠の木から遠く千里も離れようかという地において、さらには左遷という処分を受けている身では、出処進退も自分で決めることもできない境遇であるので、あの海棠の木にしてもすぐには見ることができないだろう。けれども、禍も福も同じように前もって知ることなどできないのであるから、またどうしてあの海棠の花が忽然として私の眼前にあることがないと言えようか（あの寓居に帰って海棠の花を見ることのできる日が来るかもしれない）。

なお、出典は北宋の文人張文潜（張耒）の隨筆で、文中にもあるとおり黄州に左遷された時の思いを述べたものである。

(2013/01/19 23:15 作成)